

親としては、子どもが週に16時間も勉強でなく部活動に費やすのを惜しいと思うだろうし、宿題や勉強のために夜遅くまで起きているのは心配なことだろう。

教員に至っては、一番割が合わないように見えてしかたない。朝から午後まで授業をすませたその後に、保護者との面談、部活の顧問(これは週末にまで及ぶけど)が待っている。やっと一日が終わって家に帰っても、テストの採点や報告書の作成など、持ち帰りの仕事がある。

僕の中学一年生の生徒で、入学して半年だけど、早くもテニス部が嫌になってしまった男の子がいた。それでこんなおかしなやり取りをするようになった。レッスンのとき、いつも「調子はどう？」から始めるんだけど、彼の答えはこう。「僕はテニスが嫌いです。テニス部が大嫌いです。それ以外はいい感じです。」テニス部が嫌でしかたないこと、入学したときの選択が間違っていたことを、親にちゃんと話せばどう?とある日提案してみた。きっと学校に相談して、テニス部をやめるとか他の部活に移るとか、考えてくれるよ、と。でも彼は、内申書にひびくことを気にしていて、将来大学を受験するとき、出願書を見てこう言われるんじゃないかと心配していた。「中学校で三年間部活を続けられないような、反抗的で素行の悪い方には、来ていただかなくて結構です。」まあこれはちょっと大げさだけど、13歳のときの選択ミスを問題視するなんて、大学はそこまでちまちましてないと思うんだけどなあ。

この文章を書こうとしたときに、ある日本人の友達に、部活のいいところって何?と聞いてみた。彼女の答えは驚くべきもので、一番は「根気」、つまり望むと望まざるとに関わらず、とにかく三年間何かを続ける力がつくことだそう。親としても、たとえちっとも楽しくなくても、何かをやり抜く力を子どもに持ってほしいと願うみたいだ。寒かろうが雨の中だろうが行きたくなかろうが、とにかく部活に行く。試験でも何かの締め切り前でも、行く。中学校も終わりに近づいて、部活を始めた頃のおもしろさもすっかりなくなって、これ以上部活をするなら、壁に頭を打ち付けてたほうがマシと思っても、それでも毎日、行くものなんだと。これには驚いた。こういう粘り強さというのか、それを伸ばすことは確かに望ましいことだとは思いますが、せっかくなら、子供には好きなこと、本当に意味のあることに時間を投じてほしいと、親は思うんじゃないだろうか。

最初に言ったように、部活動にはたくさんのいいことがあるとは思いますが、ルールをちょっと変えるだけで、子どもがもっと楽しく、幸せに過ごせるような、大きな変化があるんじゃないだろうか。毎年部活を変えるってのはどうだろう。一年間、ちゃんと継続する力をつけながらも、三年間ずっと最初の選択に縛られることはない。12歳と15歳じゃ考え方も大きく変わるし、いろんな種目にチャレンジできる。あと、お試し期間を設定するのはどうだろう。最初の二カ月間は、自由に部活を変更できる、というように。最後にちょっと奇抜なアイデアだけど、もし生徒が趣味でも部活外のスポーツでも、なんならバイトでもロックバンドでも、部活なみの価値があると証明できるのなら、部活動は免除、という手もある。

「小人閑居して不善をなす」つまり、暇だとロクなことがない、って意味のことばを最初に紹介したけど、退屈な時間がなければ、子どもたちがその退屈を打ち破るような何かを創造することもない、って考え方もある。プラトンの言葉「必要は発明の母」のようですね。

訳:クロッカー 梨奈 (Rina Crocker)

